研究ノート

デュルケムの社会学体系における人口学の位置

小島　宏

はじめに

周知の通り，É．デュルケム（Émile Durkheim）による著作の主要なテーマのうちの一つは社会学と他の社会科学との関係である[1]．彼は社会学と人口学との関係について深く掘り下げたことはなかったが，彼の社会学体系における一つの下位領域としての「社会形態学（morphologie sociale）」は人口を扱うものであった．また，彼は社会的事実を明確化するための社会学の手段として「道徳統計学（statistique morale）」ないし「人口学（démographie）」にしばしば言及した[2]．

実際，彼の初期の実証研究は人口学的問題を扱ったものであったし，J．ベルティヨン（Jacques Bertillon）をはじめとする人口学者の業績に立脚していた[3]．さらに，彼は1893年刊行の『社会分業論』で人口の規模と密度を社会的分業の発展の要因として強調したため[4]，人口学との関係が深かった．しかし，後期において彼の関心が「社会形態学」から「社会生理学（physiologie sociale）」へと移ったため，人口学を社会形態学の名の下に統合するには至らなかった[5]．

社会学者によるデュルケムの社会学体系の研究はいくつかある．そのうちでG．AimardとL．F．

1）例えば，以下のものがある．
Emile Durkheim, "On the Relation of Sociology to the Social Sciences and to Philosophy", *Sociological Papers*, Vol.1, London, Macmillan, 1905, pp.197−200, 257 [= "De la relation de la sociologie avec les sciences sociales et la philosophie", Victor Karady (ed.), *Émile Durkheim, Textes*, Vol.1, Paris, Minuit, 1975, pp.166−170].
Emile Durkheim et Paul Fauconnet, "Sociologie et sciences sociales", *Revue Philosophique*, Vol.55, 1903, pp.465−497.

2）なお，彼は démologie ということばも遅くとも1903年刊行の『年誌』第6巻（p.540）まで使っていた．

3）例えば，以下のものがある．
Émile Durkheim, "Suicide et natalité. Étude de statistique morale", *Revue Philosophique*, Vol.26, 1888, pp.446−463.
Émile Durkheim, *Le Suicide. Étude de Sociologie*, Paris, Alcan, 1897 [= George Simpson (ed.) and (tr.), *Suicide : A Study in Sociology*, New York, The Free Press, 1951].
Émile Durkheim, "Le divorce par consentement mutuel", *Revue Bleue*, Vol.44, No.5, 1906, pp. 549−554.

4）Émile Durkheim, *De la Division du Travail Social. Étude sur l'Organisation des Sociétés Supérieures*, Paris, Alcan, 1893 [= W. D. Halls (tr.), *The Division of Labor in Society*, New York, The Free Press, 1984], p.225.
ただし，『社会学的方法の規準』ではそのように強調し過ぎたのは誤まりであったと述べている．
Émile Durkheim, *Les Règles de la Méthode Sociologique*, Paris, Alcan, 1895 [= Steven Lukes (ed.) and W. D. Halls (tr.), *The Rules of Sociological Method*, New York, The Free Press, 1982], p.146.

5）フランスにおける社会学と人口学の間にみられる相互の孤立と無関心については責任の一端が彼にあると言われる．
Jean Stoetzel, "Sociologie et démographie", *Population*, Vol.1, No.1, 1946, p.79.

Schnoreは社会学体系と経済学ないし人類生態学との関係，H. C. SelvinとA. Desrosièreはそれと統計学の発展との関係を扱っているが，人口学との関係に直接触れているわけではない．J. Vialatouxはデュルケムの社会学理論の人口学にとっての含意を扱っているが，やはり本稿の関心とは異なる[6]．本稿はデュルケムの人口学に関する概念を彼の社会学体系との関係で明らかにしようとする試みである．そのため，彼による社会学に関する著作を分析するとともに彼の責任編集による *L'Année Sociologique*（以下，『年誌』と省略）の各巻における書評欄の編成を分析する．なお，それに先立ち，ベルティヨンの人類科学体系における人口学の位置について論じる．

1. ベルティヨンの人類科学体系

ベルティヨンは1877年刊行の *Annale de Démographie Internationale*（以下，『年報』と省略）に「人口学の位置」と題した論文を載せているが，デュルケムは同誌に掲載されたベルティヨンの実証研究をしばしば引用しているので[7]，当然この論文も読んだものと思われる．特に注目されるのはベルティヨンの提示した人類科学体系がのちにデュルケムが図示した社会学体系に部分的に類似していることである．ベルティヨンは人類科学を自然部門と社会部門に分け，前者をさらに形態学的区分（解剖人類学と民族学）と生理学的区分に分けている[8]．彼は後者を言語人類学，法・神話人類学（経済・道徳規則ないし世俗・宗教規範を対象とする），人口学に三区分している．彼は人口学を社会集団の状態と人口の動向を扱うものとし，静態人口学と動態人口学に二分しているが，この区分はA. Comteによる社会学の二区分とも類似している．

デュルケムによる社会学の制度化に先立つ人口学の制度化は1877年における「国際人口会議」の開催と『年報』の創刊によると言われるが[9]，これに至る人口学の発展にはベルティヨン一族（A. Guillardとその娘婿のLouis-Adolphe Bertillonとその孫のJacques Bertillon）の貢献が大きかったとのことである[10]．この発展の背景には普仏戦争でのフランスの敗北により低水準の出生力と人口増加に社会科学者の関心が集まったことがある[11]．ベルティヨンが人類学という既存の分野の

---

6) Guy Aimard, *Durkheim et la Science Économique*, Paris, Presses Universitaires de France, 1962.

Leo F. Schnore, "Social Morphology and Human Ecology", *American Journal of Sociology*, Vol.63, No.6, 1958, pp.620－634.

Hannan C. Selvin, "Durkheim, Booth and Yule : The Non-Diffusion of an Intellectual Innovation", *Archives Européennes de Sociologie*, Vol.17, No.1, 1976, pp.39－51.

Alain Desrosière, "Histoire de formes : statistiques et sciences sociales avant 1940, *Revue Française de Sociologie*, Vol.26, No.2, 1985, pp.277－310.

Jean Vialatoux, *Le Peuplement Humain*, Vol.2, Paris, Ouvrière, 1959.

7) Émile Durkheim, "Introduction à la sociologie de la famille", *Annales de la Faculté des Lettres de Bordeaux*, Vol.10, 1888 [＝"Introduction to the Sociology of the Family", Mark Traugott (ed.) and (tr.), *Emile Durkheim on Institutional Analysis*, Chicago, The University of Chicago Press, 1978], p.218.

Durkheim, 前掲（注3）書, *Suicide*, p.269.

8) Jacques Bertillon, "Place de la démographie", *Annales de Démographie Internationale*, Vol. 1, 1877, pp.517－519.

なお，ここでいう民族学（ethnologie）は人類の外観を研究する分野である．

9) Terry Nicholas Clark, *Prophets and Patrons: The French University and the Emergence of the Social Sciences*, Cambridge, MA, Harvard University Press, 1973, p.136.

10) Michel Dupâquier, "La famille Bertillon et la naissance d'une nouvelle science sociale : la démographie", *Annales de Démographie Historique 1983*, pp.293－311.

11) Joseph J. Spengler, *France Faces Depopulation : Postlude Edition 1936－1976*, Durham, Duke University Press, 1979, pp.121－134.

下位領域として人口学を制度化しようとしたのに対して，デュルケムは既存の分野を下位領域として社会学を制度化しようとした点で異なるが，『年誌』を通じて社会学を制度化する際にベルティヨンの人類学の区分を参考にした可能性は十分ある．

2. デュルケムの社会学体系

デュルケムは図1の通り，1910年刊行の「社会学と社会科学」の中で社会学体系を図示している．彼は社会学をまず三分しているが，社会形態学と社会生理学を主要な部門とし，一般社会学については特に説明していない．社会生理学を六分しているが，最初の四区分を主要なものとしている[12]．社会学を形態学と生理学に二分するという考え方は1888年刊行の「社会（科）学開講講義」においてすでに示され，1895年刊行の『社会学的方法の規準』でより明確に提示された[13]．そして，1899年刊行の『年誌』第2巻の書評欄に「社会形態学」という大区分を設けた際の序文の中で，彼は人口学が地理学および歴史学とともに社会形態学の一部として社会学に統合されるべき専門科学であるとの見解を示した[14]．彼は地理学が各国の国土の配置を研究し，歴史学が農村と都市の集団の変化を跡付けるのに対して，人口学は人口の分布等に関するすべての問題を扱うものであると述べているが，地理学および歴史学との区別を明確にするためか人口学を狭く定義しているように思われる．彼は1900年刊行の「社会学とその科学的領域」の中で社会学に関係する事実はすでに既存の科学に先取りされていると述べ，その最初の例として人口学による人口動態・静態の先取りを挙げているが，ここでは人口学の一般的な定義に従っている[15]．

図1　デュルケムによる社会学の主要区分

社会形態学
- 社会組織化との関係における諸国民の地理的基盤の研究
- 人口の研究 ― その規模，密度，地上における分布 ―

社会生理学
- 宗教社会学
- 道徳社会学
- 法社会学
- 経済社会学
- 言語社会学
- 審美社会学

一般社会学

（出所）Émile Durkheim,"sociologie et sciences sociales" H. Bouasse *et alii*(éd.), *De la Méthode dans les Sciences*, deuxième édition, Paris, Alcan, 1910, pp. 307-333 ["Sociology and the Social Sciences," Mark Traugott(ed.) and(tr.), *Emile Durkheim on Institutional Analysis*, Chicago, The University of Chicago Press, 1978], p. 83.

デュルケムは科学における分業により生じる問題を異常なものだと認識し，人口学，歴史学，民族誌学，政治経済学，地理学を社会学の中に統合しようとした[16]．さらに彼は，各種の専門分野を統一された科学の体系に統合すべき理由として①社会学的現象の間の相互依存性を認識し損うこと，②各学問分野における基礎概念が不必要に増加すること，③すべての社会現象を単一の学問分野からしか解釈しない傾向があること，④各学問分野の間に相互浸透性があること，⑤各学問分野の研究領域が

12) Durkheim, 前掲（図1）論文, p.81.

13) Émile Durkheim, "Cours de science sociale. Leçon d'ouverture", *Revue Internationale d'Enseignement*, Vol.15, 1888 [= "Course in Sociology : Opening Lecture", Mark Traugott (ed.) and (tr.), *Emile Durkheim on Institutional Analysis*, Chicago, University of Chicago Press, 1978], pp.64-65.
Durkheim, 前掲（注4）書, *The Rules*, p.57.

14) Émile Durkheim, "Morphologie sociale", *Année Sociologique*, Vol.2, 1899, pp.520-521.

15) Émile Durkheim, "La sociologia e il suo dominio scientifico", *Rivista Italiana di Sociologia*, Vol.4, 1900 [= Kurt H. Wolfe (tr.), "Sociology and Its Scientific Field", Kurt H. Wolfe (ed.), *Essays on Sociology and Philosophy*, New York, Harper & Row, 1964], p.373.

16) Durkheim, 前掲（注4）書, *The Division*, pp.303-304.

重なったり，漏れたりすることを挙げている[17]．そして，④の例として人口学と地理学の関係が挙げられている．

他方，デュルケムは人口学ないし（道徳）統計学を社会学的研究の手段とも考えていた．彼は1888年刊行の「家族社会学序論」の中で人口学を法学，民族誌学，歴史学と並んで帰納のための主要な源泉であるとし，ベルティヨンの業績に立脚すると述べている[18]．彼は「自殺と出生力」の中で人口の比較研究の重要性を強調しており[19]，その後の実証分析でも人口学者の業績を利用している．彼は社会学的研究の手段としては「人口学」よりも「(道徳）統計学」ということばを使うことが多かったが，両者を明確に区別していない．これは19世紀末における一般的な用語法に従ったまでのことかもしれない[20]．

3. *L'Année Sociologique* の書評欄の区分

デュルケムの責任編集による『年誌』第1～12巻（1898～1913年刊行）の各巻における書評欄の編成は「犯罪社会学（と道徳統計学)」という大区分を除き，前述の社会学体系の区分に似ているが[21]，人口関係文献の振り分けからみても「人口学」と「(道徳）統計学」が明確に区別されていなかったようである．表1に示された通り，第2巻から「社会形態学」，第4巻から「犯罪社会学と道徳統計

表1　*L'Année Sociologique* 誌上における書評欄の大区分とデュルケムの評者としての貢献

大区分名	巻番号											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
一般社会学	1	1	1	1**	1**	1**	1**	1**	1**	1**	1	1**
宗教社会学	2	2**	2	2	2	2	2	2	2	2	2**	2**
道徳・法社会学	3**	3**	3**	3**	3**	3**	3**	3**		3**	3**	3**
法社会学									3**			
犯罪社会学	4	4	4									
犯罪社会学と道徳統計学				4**	4**	4**	4**	4**	4**	4**	4**	4**
経済社会学	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
社会形態学		6*	6*	6*	6*	6**	6**	6**	6	6	6	6**
その他	6**	7**	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7

（出所）*L'Année Sociologique*，第1—12巻，1898—1913年．
（注）表内の番号は大区分の番号．
* デュルケムが大区分内の書評を単独で担当
** 〃 共同で担当

17) Durkheim，前掲（注1）論文，"De la relation"，p.168.
18) Durkheim，前掲（注7）論文，pp.217-218.
19) Durkheim，前掲（注3）論文，"Suicide et natalité"，p.446.
20) 例えば，ベルティヨンの教科書によれば，人口学は家庭福祉の統計と知識・道徳統計も対象とし，道徳統計は犯罪，自殺，離婚の傾向に関するものである．
Jacques Bertillon, *Cours Élementaire de Statistique Administrative*, Paris, Société d'Édition Scientifique, 1895, p.547.
21) なお，彼が主要な領域でないとした言語社会学と審美社会学は「その他」という大区分に含まれている．

学」という大区分ができたが，人口関係文献の書評はしばしば彼自身によっていずれの大区分の中でも行われた．Y. Nandanによれば，本来第4区分の中で行われるべき道徳統計関係文献の書評はあまり論理性もなく，第6区分の「社会形態学」をはじめとする各区分に振り分けられることが多かったとのことであるが[22]，出生，結婚，自殺による死亡に関する文献の書評は「犯罪社会学（と道徳統計学)」，移動と人口静態に関する文献の書評は「社会形態学」に振り分けられる傾向があるように思われる．

Nandanによれば，「犯罪社会学（と道徳統計学)」という大区分はG. Richardを『年誌』に引き入れるために設けられたとのことなので[23]，デュルケムの念頭にあった社会学体系の中では道徳統計学が人口学と重なり合うものとして意識されていたのであろう．このことはいずれの区分に振り分けられるにしても人口関係文献は彼自身によって書評されることが多かったことからも伺える．また，彼が第4区分の共同担当者になった第4巻から名称に「道徳統計学」が加わったことからも伺える．

おわりに

前稿でP. ブルデューの出生力理論について論じた際に彼がデュルケムの影響を受けていると述べたが[24]，本稿ではデュルケムの出生力理論を扱わなかったため，そのような影響について論じることができなかった．デュルケムの出生力低下に対する考えは「自殺と出生力」や『年誌』の書評に表われているので，次の機会にはこれについて論じたい．デュルケムにしてもブルデューにしても初期に出生力に関する著作があることはフランス社会学の特殊性を伺わせるようで興味深い．

---

22) Yash Nandan (ed.), *Emile Durkheim : Contribution to L'Année Sociologique*, New York, The Free Press, 1980, p.401.

23) Nandan, 前掲（注22）書，p.399.

24) 小島宏，「P. ブルデューの『出生力戦略』の人口学的評価」，『人口問題研究』，第45巻4号，1990年，p.58.